

## 歴史地理学における考古地理学の任務

小 野 忠 淵

まえがき

人類時代の過去の地理を究明する歴史地理学の研究には、おもに対象と資料の差異によって、考古(歴史)地理学と文献(歴史)地理学との二つの分野がある。筆者は一九七七年の四月に開かれた本学会の大会において、旧石器時代から有史時代にわたる研究の事例をあげ、「歴史地理学における考古地理学の任務と効用」について発表した。本稿では紙数の都合上、考古地理学が歴史地理学のなかで占める位置と任務や効用について、その要点を記述しておくことにする。

### 一、考古地理学の意義

まずはじめに、考古地理学とはどんな学問なのかといった、斯学の意義から述べておこう。考古地理学を定義風に簡明直截にいうならば、歴史地理学の分野に属し、人類が遺した遺跡や遺物を決め手の資料に使って、人類時代の

過去の地理を明らかにする学問であるVとすることができる。

この学問が地理学の体系のうえに占める位置は後で述べるが、人類時代の過去の地域を対象とする歴史地理学と同じ厚みある空間を扱い、古文獻のある有史時代を対象とする文献地理学とは姉妹関係にある。対象とする時間的空間の上限は、人類が出現して大自然が人類の環境となり、原初的な文化景觀化作用がはじまった旧石器時代からである。その下限は、過去の文化地域や人文事象が本来の意義と機能を失った、現在の直前までの厚みある化石化した空間である。取り扱う時間の長さ、いいかえると空間の厚さは、百万年とも二百万年ともいわれる第四紀の人類時代なので、文献地理学が扱う数千年や千数百年とは遙かに厚く、現在からの遠近の度も大いに異なるが、有史時代の考古地理は文献地理学と併行するところから、上記のように姉妹関係にあるとすることができるのである。

取り扱う対象と研究の方法論は地理学や歴史地理学と本質的に同一であるが、斯学のもつとも固有な特質は研究に使う資料にある。過去の地理を解き明して記載する場合、土地（場所）や地域に結びついた人類の遺跡や遺物、すなわち地縁的な考古資料というもの言わぬ物的証跡に拠るところにある。文献地理学において古文獻を決め手の資料に使うように、考古地理学にあつては、事象の認定や所論の論定の決定的資料に地縁的考古資料を使うのであるが、このばあい、古文獻や自然遺物は参考資料ないし傍証資料として援用するのである。

考古地理学は考古学の部門に属する地理的考古学ではなく、考古資料を活用して過去の地理を究明する歴史地理学の一分野であることは先にも述べた。しかし、専ら考古資料を使うところから、遺跡や遺物そのものの意義や性質と採取の方法など、資料として正しく活用することができるだけの考古学の知識が必要である。また、たとえ遺物や遺跡が真物であっても、出土地点や共伴遺物と、包含する地層や附近の地形とが結びついた資料、いいかえると「地縁・

地域的考古資料」として用いねばならない。このような考古地理化された資料は、環境論や地域論によって研究を進めるうえの重要にして不可欠な資料であり、遺物や遺跡そのものの解明を目的とする考古学とは、この点で明確に異っている。

このように考古地理学は、環境への人類の適応現象を土地地域に則して明らかにする環境論と、適応の結果生じた地域構造や地域的個性を記録する地域論とから、地球の地域そのものを究明しようとする地理学本来の目的や方法論において一致している。ただ異なるところは、人類時代の過去の地域を明らかにするための資料として、考古地理資料を決め手の資料に使うことである。

## 二、歴史地理学における考古地理学の位置

地理学の体系に占める歴史地理学の位置は、人文地理学や地域地理学（地誌学）と併列する位置におかねばならない。従来、人口地理学・集落地理学・経済地理学などと同列に置かれ、人文地理学の一ブランチとして扱われることが多かった。しかし第一に、対象とする空間の時点が現在と異なり過去の厚みある空間であり、第二に、地域を究明するための資料が考古資料であり、他の分野の資料と決定的に異なるからである。そして第三には、過去の地域にも現在の地域と同様、自然地理学や人文地理学と地誌学の対象となる地域と地理的事象が存在したからである。

ところで、地理学の目的観は大きく二つに分けられる。その一つは、現在の空間（地域）に視点を据え、時間を排除した地域を描写する景観論や地域論の立場であり、他の一つは、空間に時間を含めて厚みある時間的領域と考へ、人類時代の任意の過去の地域を対象として、時間的空間を扱う過去の地域の復元論や、地域変遷史論の立場である。

また、過去の地理的事象や地域を扱う地理学の分野に三つの立場がある。その第一は、視点と視野を過去の空間に合せ、現在の空間から切り離した任意の過去の空間の復元を目的とする時の断面復元説である。第二は、視点を現在と未来の空間に向け、現在の地域と地理的事象を説明するためのいわば現在の地域の歴史の説明説ともいえる立場であって、この方法は真の意味の歴史地理学とは言い難い。第三の立場は、現在の地域の究明を究極の目的とするのであるが、現在の空間をより奥深く理解するための手段・方法として、過去の地域を復元し、変遷史的に今日におよぼす地域変遷史的立場である。筆者は第三の立場にたち、その方法として、現在から過去へ遡る倒叙的方法と、過去から現在に降る正叙的な地域変遷史的方法に加えて、化石化した過去の事象に活力を与えてダイナミックに理解する方法の一つとして、民族学的類推法を援用することになっている。

歴史地理学は、過去の厚みある地域の地理を明らかにする学問なので、取りあげる研究対象の時代的位置づけを明らかにするため、その前提として特色のある時代毎に区分しなければならぬ。初期には先史学や考古学の時代区分を援用したが、考古学の発達によって時代区分に変化を生じ、用語のもつ概念も変ったので、従来の先史地理学と狭義の歴史地理学を、時間的先後の関係におく単純な区分法に変更を加えることが必要になった。

小牧実繁が提唱した先史地理学は学界や教育界に大きな影響を与え、今日もそれによる研究者が多い。提唱された当時、先史地理学の内容に縄文時代と弥生時代が含まれ、時として古墳時代も併せて扱われたため、先史地理学を原始時代の地理の研究と受けとめて理解する人が多かった。第二次世界大戦後藤岡謙二郎は、石器時代を先史時代、弥生時代と古墳時代を併せて原史時代とよぶ考古学の趨勢に合せ、従来の文献による歴史地理学を狭義の歴史地理学とし、これらの三分野を包括して広義の歴史地理学とすべきであると提唱し、これが今日広く使われている。

筆者は一九六〇年、本紀要Ⅱの「先、原史地域の諸問題」において、広義の歴史地理学を単に歴史地理学とよび、文献時代の狭義の歴史地理学を有史地理学の語に改めた。また地理学を、時間的空間を扱う学問とみる立場から、歴史地理学と現在地理学とに区分するという見解に従った。その後計画地域を扱う分野を未来地理学と仮称し、取り扱う資料や対象によって、考古地理学と文献地理学と遺跡地理学として次のごとく位置づけることにした。

		時間的分類	資料的分類
地 理 学	歴 史 地 理 学	先史地理学	考古地理学 文献地理学
		原史地理学	
		有史地理学	
	現 在 地 理 学	遺跡地理学	
	未 来 地 理 学	地域計画	

厚みのある時間的領域を時代的特質によって、先史地域を扱う先史地理学、原史地域を対象とする原史地理学、有史地域の地理を明らかにしようとする有史地理学に分け、考古地理学はこれらの全分野に直接間接関与する任務をもつものと考へた。遺跡地理学は過去の地域を扱うのではなく、今日の地域に遺存する遺跡や遺物の地理的意義や分布について記載を行う遺跡地誌の性格をもっているもので、現在地理学の領域に属し、歴史地理学の範疇には入らない。

歴史地理学の対象になる時間的領域は、本来の機能を失って化石化した地域であり、現在地理学は、すべての事象が生きて機能している現時点に直結した薄い時間的領域である。未来の地域は推定や推測によって生み出される計画地域であって、過去と現在の資料に拠って計画される仮定された青写真真的創造地域ともいえる地域である。

### 三、先史地理学から考古地理学へ

先史地理学が提唱された当時は、日本の考古学はまだ十分な発達をとげていなかったため、時代区分も厳密な根拠

をもっていなかった。旧石器文化も存在が知られていなかったのも、縄文文化を最古の文化と考え、弥生文化を併せて先史時代とよんでいた。弥生文化は金石併用時代ともよばれ、新石器時代の延長であるかのごとく考えられ、縄文文化と一括して取り扱うことが当然なことであるとされていた。古墳文化は野蠻・未開な縄文・弥生の時代と違って、一段と進歩した文明に属する文化として原史文化とよばれ、弥生時代以前の文化と区別する見解が支持されていたのである。

第二次世界大戦が終熄し、抑圧されていた学問の芽が、一斉に枝葉を伸ばした昭和二十五年代には、後期旧石器文化の存在が知られたことから、日本の土地での居住の時代的上限が洪積世の大陸時代にまで引きあげられた。一方、弥生文化が新石器時代の縄文文化と源流の異なる稲作文化と金属器文化に胚胎することが明らかに至り、弥生文化を先史時代から切り離して原史文化の範疇に含め、古墳文化と併せて原史時代とよぶようになったのである。

先史時代を今日では、石器を主要な道具に使い、採捕経済に低迷していた旧石器時代から新石器時代までの石器時代を指すことになっている。また原史時代は、稲作農耕と金属器文化が渡来し波及して展開した弥生文化と、その発展的延長としての古墳文化を併せた概念として広く使われ、一般にも定着している。

有史時代は、歴史を組みあげる決め手の資料に古文献や古地図が使われ、民俗資料も動員されることから考古学はほとんど使われないか、使っても効果の薄いものと考えられてきた。有史時代を対象とする考古学は歴史考古学として着実に進められていたのであるが、上記の理由のほかに研究者が少なかったこともあって発達が遅れたこともいふまでもない。戦後有史考古学とよびその研究者が増加し、加えて平城京跡や大宰府跡、周防国府などの都城や地方政庁跡の調査が進められた。一方昭和四十年代から急速な地域開発に伴う事前調査が全国的に行われ、古代から中世の遺

跡が夥しく掘り出されるに及んで、八世紀以降の歴史が考古資料によって裏付けられたり、古文献に載っていない史実が明らかにされるなど、考古学の果す役割の大きいことが広く認識されるに至り、有史考古学の真価が正しく評価されるようになったのである。このように、有史時代も、考古学の成果を活用することによって往時の地理を明らかにすることができるようになったことから、「狭義の歴史地理学」という用語を「有史地理学」に改め、文献地理学と協力してこの時代の地理の究明に当ることになったのである。

先史地理学・原史地理学や有史地理学などはそれぞれ時代的特色のある時間的空間のまとまりとして、過去の地理を研究する対象にすることができる。これらの時代的地域は、縄文前期とか弥生中期、あるいは古墳後期などのごとく文化小期に分けられ、さらに前期前半、中期中葉後期後半などのごとく細かく薄い空間として研究することができる。このように厚い空間から次第に薄い空間へと追究していく方法と、薄い空間の積分的地域として時代的地域にまとめとらえる方法とがある。後者の行きつくところは、居住の初源から今日の直前までの厚みある空間を同時に対象にし、その変遷の中で、環境への適応と淘汰のメカニズムを高い視点と広い視野から客観的に、時間と空間の両面から検討することができ、因果関係と一般的傾向法則をとらえることができる。考古地理学の特質がある。

しかしながら物いわぬ考古資料に拠るために、資料の性質上その数が少なかったり、資料が片寄っているばあいにはめざす帰結が得られなかったり、環境論と地域論や地域変遷史論から法則性が引き出し難いこともあるので、このようなマイナス面があることも十分に配慮して取り扱わねばならない。

このようにみると、特定の時代相によって時間的に区分された、石器時代を扱う先史地理学の分野だけでは、歴史地理学が求める法則性を追求することができないところから、原史地理学や原史地理学へと展開し、さらにこれ

らを一括し、人類時代の厚みある空間として同時に扱う考古地理学が要請せられるのである。

#### 四、考古地理学の効用

次に歴史地理学における考古地理学の効用を幾つかあげておくことにしよう。

第一にあげられることは、過去の地域の復元である。たとえば登呂遺跡の面的な発掘調査によって、可視的に、村落と水田址や背後の自然堤防と森などの往時の景観が復元せられた。また、弥生時代の遺物に共伴する炭化米や粃の瓦痕土器の分布から、弥生時代の稲作農耕文化圏を描き出すことができたのもその例である。

第二には、文献的な地理的知見を考古資料によって実証することができることである。後漢書や魏志倭人伝所載の倭国の内乱が発生した地域を、防衛機能をもつ高地性集落の分布から描き出すことができたのもこの例の一つである。見張台や山塞の機能をもつとみられる二世紀後半の高地性集落の分布地域が、西は安芸と伊予から、東は大和以西の畿内から瀬戸内と紀伊の北西の限られた地域であるところから、倭国内乱が起った時期に上記の地域で軍事的緊張が発生していたことを示しているとみることができからである。

第三には、自然環境の変遷の傾向がとらえられることで、文化遺物や遺構を包含する海浜の沖積層の高度の分布から、完新世における地盤変動の傾向をとらえることができたのもその例である。本州西端部の日本海岸は縄文晩期の包含層が満潮面から海拔二メートル以下にあって、極めて緩慢ながら沈降の傾向を示している。これに対し、瀬戸内北岸では、宇部海岸が最も高く海拔九メートルもあって隆起傾向を示しているが、東西両方向に漸傾的に下っており、熊毛半島や周防大島周辺では満潮面下に沈水していて、安芸灘造盆地運動を立証している。このような地盤の変動傾

向を示す遺物包含層の存在から推して、少なくとも過去二〇〇〇年以降同一傾向の地盤変動の継続を示唆するものと考えられ、南海地震のときの変動量が大きかったところから考えて、埋立地の造成に当っては、地盤の変動傾向や沈降量を考慮した施工をおこなうことが必要になる。

第四には、考古資料を手がかりに、有史時代の海水準変化や地形変貌と、耕作景観の変遷を知ることができることである。響灘の沿岸に分布する段丘や砂丘において、新砂丘砂におおわれた中世の古臺や、福山市の草戸千軒遺跡のように、河床下の中世集落と遺物包含層などから中世に小海退があったことがわかり、このことが、干拓新田の成立の一因になっていたことを指摘することができる。

第五の例として、環境に対する地理的適応の一般的傾向性をとらえることがあげられる。日本列島における後水期の海水準変動と気候変化の傾向曲線や、縄文早期以降の高地性遺跡の出現と消滅の関係から、集落の高地出現が一般に気温と海水準の上昇期に多いところから、温帯季節風帯の日本列島では、高度的居住帯の垂直的振幅には自然環境の営力が潜在的に関与していることがわかる。一方、弥生時代以降にあっては、自然環境の変化とは無関係に高地遺跡が出現し消滅するところから、文明の時代に入ると、集落占地の高度的振幅の変化に人文的条件が作用していることを指摘することができる。

## むすび

右において、まず考古地理学の意義と歴史地理学に占める斯学の位置を述べた。ついで従来広く知られ、多く活用されてきた先史地理学では、その研究の対象が、限られた時代的空間であるために、考古資料によって今日の直前の

空間に至るまでを變遷史的に復元することができなかつた。考古資料を決め手の資料に使う立場から、先史・原史・有史を問わず、自由な視点で、人類時代の任意な時代の空間を扱う考古地理学の方法によって、欠けていた原史地域や有史地域の空白を埋めることができることを、若干の事例をあげて指摘した。

### 参考文献

- 喜田貞吉「日本の歴史地理」『地理学本論』第四篇 岩波書店 一九三一  
 小牧実繁『先史地理学研究』内外出版印刷 一九三七  
 藤岡謙二郎『先史地域と都市域の研究』柳原書店 一九五五  
 日本考古学協会編『登呂』毎日新聞社 一九五五  
 桑代 勲「瀬戸内海 of 海底地形」地理学評論 第三二号第一号 一九五九  
 小野忠熾「先原史地域の諸問題」『地域の変貌』歴史地理学紀要2 歴史地理学研究会 一九六〇  
 同 「新田成立の自然的基礎」地理科学二号 一九六二  
 藤岡謙二郎「考古地理学とその課題」『近畿古文化論攻』吉川弘文館 一九六三  
 小野忠熾「先原史時代における居住帯の垂直的遷移現象」『考古地理学』歴史地理学紀要5 歴史地理学研究会 一九六三  
 浅香幸雄「序説—学史と研究法—」『日本の歴史地理』大明堂 一九六六  
 小野忠熾「『考古地理学』の意義」考古学ジャーナル三号 一九六七  
 藤岡謙二郎『先史地域の変遷史的研究』柳原書店 一九七〇  
 中関弘太郎「日本における二、〇〇〇年B・Pころの海水準」名古屋大学文学部研究論集LXII 一九七四  
 小野忠熾「考古地理学からみた響灘沿岸の海岸地形の形成」第四紀研究 第四卷第四号 一九七五  
 菊地利夫『歴史地理学方法論』大明堂 一九七七  
 小野忠熾「歴史地理学における考古地理学の任務と効用」歴史地理学会々報第九二号 一九七七  
 同 「高地性集落について」『城』社会思想社 一九七七